も、三十分や一時間と費す私、まして一度行き出したら、決して出直しはしまい、横道には這入るまい變更はしまいと思つて居る。いえ、さうせねばならぬ筈の、買ひ直しも出來ない、かけがへもない、只一つの物を、只一度きめるのであるから、全く私にはむつかしい〳〵困難な仕事なのであつた。心の苦悶は前の時よりも、更に〳〵はげしかつた。殊に私は師範生であると思つた時、又どういふつもりで、どんな考への下に教育事業にたづさはつたなら、よいのであらうかと思つた時、苦痛はいよ〳〵はげしくなり、迷ひはひよ〳〵深くなり、闇から闇へ、一筋の光明を探して歩く私の心は、何の手がゝりもなくて、不遠慮な月日ばかりが、ずんずん立つてゆくのにつれて、いら〳〵しくなつて來た。そしてまるで子供を見失つた母親の様な、いぢ〳〵した心持で、見つかりさうでゐて見つからぬ、今に手に觸れさうでゐて何のこたへもない、やさしさうでむづかしいほんとに雲をつかむ様な探し物の爲に、夜も晝も熱中したのであつた。

勿論私の尋ね物は「とるべき道」であつたのであるが、それには大事な先決問題があつた。「人は何の爲に生れたのだらう、人生の意義は何處にあるのだらう」といふこれである。これがわからなければ人に對する教育主義も、定め得られないわけのものではなからうか。で私は先づこれから探し初めたのであつたが、杖とも提灯とも頼む説教も、倫理書も、教室の講義も、せつかちな私の心をいらつかせるより外には、何の効果もなかつた。ほんとにその時分私は釋迦からもクリストからも見捨てられ、友達からはあざけられ、困りに困つたあげくの果、苦しみのあまりに悶々の狀をもらす先生からは、「そんなあなたの様なぐる〳〵循環する考へでは、話にならない。ある一定の止る處を見出せないか。それを見出さなければ駄目だ」といはれ時には「そんな野狐禪流の考へではいかぬ」すげなく言下に退けられ、たまに親切に聽いて下さる方、導かうと努力して下さる方はあつても、私の眞の心持を理解して、同情して下さる方は一人もなくて、全く頼りない私はつく〳〵、人生の不可解を叫んで大瀑布に身を投じた、藤村操に思ひを寄せずには居られなかつた。けれど

もまだ〳〵生に執着の強かつた私は、不可解な世をがまん出來ない程氣にしながらも、「今に何とかなるだだらう。今に何かつかめるだらう。」と淺間行きも華嚴行きも、今目のまへのことの様に考へはしなかつた。只、人から見れば如何にも馬鹿げた、時には自分でも、ほんとに馬鹿げたことではあるまいか、と思ふことがないでもなかつた、けれどどうしても、頭から取り去ることの出來ない、深い〳〵懷疑に落ちて、落ちたまゝ一年二年と、立つて來たのであつた。

此處の四年生になつた今日、今も尙私には、何の爲に人は生れて來るのか、又、來たのか、それはさつはりわからない。然し私は「人は誰でも空間的に時間的に——その二つが衝突しない限りに於て——出來る丈の發展を遂げ樣とする、欲望を持つて居るものである。どんな人でも欲望の滿足、完欲、といふことを望んで居るものである。」といふことがわかつた。そしてこの欲望を滿足させるには、孤立しては迚も出來るものではない。どうしてても他人からの助けが必要である。助け、助けられせねばならぬものである。即ち人事的交渉は自然の情として、此處にはじまつて來た樣なわけで、家族間の道德も、社會上の秩序も、要求から生れて來たもので、元が正しく行はれない場合には、欲望の滿足も決して遂げられるものではない、といふこともわかつた。

要するに私は今辛うじて、人間はどうしてゆけばよいものであるか、といふことだけがわかつたのである。私の行くべき道、安全な確かな道、それだけを今辛うじて見出すことが、出來たのであつた。

此頃心はやゝ平靜である。

⊙やすりやの小僧　　尋　三

おさないの朝僕が學校にいこうと思つて、家を出ると、やすりやの小僧が、さくらの花を、とつて居ますから、こら、としかると、あたまを、ぺこぺこ、さげてあやまりました。

學校から歸りに僕にしかられた小僧が、僕の顏を見て、あいつだ、あいつだ、とほかの小僧に云ひました。

かとうな人はしかられてもへいきで、人がいなくなるとすぐわるい事をします。